

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 田中 鉄也	留学機関名 デリー大学
留学先国名 インド共和国	留学期間 西暦 2010 年 9 月 ~ 2012 年 8 月
研究テーマ 近現代インドにおけるアグルワール・カーストの再編成——ラージャスターン州におけるラーニー・サティー寺院運営を中心に——	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>「BRICs」と総称される新興経済大国、その中でもインドの国際社会における存在感は大きい。インドを研究対象とする申請者も、日本の当該国への関心の高揚をうれしく思う反面、その関心が概して経済面に偏向していることに不安を覚えざるを得ない。当該文化への視座が十分でない点で、真の相互理解が未だその途上であるといえる。人文学領域は短期間での成果獲得を不得手とするが、これまで南アジア圏の多様な文化層の分析を深化させ、国際交流の普遍的意義を長い間追求してきた。その人文学の一分野の下、本研究も日本でいまだ誤解が多い「カースト」の正しい理解に寄与することを目標としている。</p> <p>専門的にいえば、本研究はインドの（父系）出自集団「アグルワール・カースト」が、インド近現代にいかにも再編成されたのかを問うものである。カーストとは、インドにおける婚姻、食事、職業などに関する規制のもとにおかれた排他的な社会集団を指すが、インドでは〈生まれ〉を意味するジャーティ (<i>jāti</i>) と呼ばれる。しかし近現代史における「カースト」範疇概念は近年再検討されてきた。英国植民地政策の一環で実施された国勢調査などで、カーストは「伝統的に固定的で、序列的に階層化された範疇」という当時の官僚のインド理解に沿って「構築」された。その概念は、社会改革運動やナショナリズム運動など植民地政策への応答の中で、インド人に引き受けられ、また彼らによって再構築されてきたものでもある。</p> <p>この近現代インドが経験してきた「カースト」再編成というマクロな分析の下、現在多くの歴史学者がミクロな視座から個々の諸集団の事例を再検討し始めている。本研究はその一つに類するもので、19世紀から現代にかけて体験された「アグルワール・カースト」の再編成を検討する。アグルワールとは、16世紀頃から北インド一帯に広がった裕福な商人集団 (<i>vaiśya</i>) の一つだが、先述した「カースト」の観点からは、厳密な考察が試みられてない存在でもあるために、本研究で着手する必要がある。</p> <p>従来この研究は、植民地期の公的記録や、カースト団体が編纂・出版した「族譜」（その出自や成員の系譜などを記した史書）などの歴史学的分析によって進められてきた。それに対し本研究の学術的意義は、植民地支配下のコンテクストで以上を検討すると同時に、現代社会においても継続される動向をも併せて精査する点にある。本研究はラージャスターン州北部に位置するラーニー・サティー寺院をアグルワールの「結集」を構成する一要素として見る。彼らのカースト意識が高揚する 20 世紀初頭に、同寺院は建立され、巨大寺院に成長した。その運営記録を紐解き、カースト結集の文脈に合わせることで、言説としてのカーストの結集が「如実化」される（又はされ得ない）変遷を明らかにすることができよう。</p>	

# 成果報告書

記入日 2012 年 10 月 30 日

氏名	田中 鉄也	留学先国名	インド	所属機関	関西大学博士課程後期課程
研究テーマ：近現代インドにおけるアグラワール・カーストの再編成—ラージャスターン州におけるラーニー・サティ寺院運営を中心に					
留学期間	2010 年 8 月 ~ 2012 年 9 月				
<p>【留学最終報告書】</p> <p>松下幸之助記念財団から2年間の奨学金支援（松下国際スカラシップ）をいただき、2010年8月からインドはデリー大学で開始した留学も、2012年9月に2年間と2カ月の期間をもって終了した（調査の必要上、2012年8月から9月の2カ月間、インドでの滞在を延長した）。以下にこれまでの留学の成果を記し、最終報告としたい。</p> <p>報告者の留学先、デリー大学（University of Delhi、1922年創立）は20万人を超える学生数と85のカレッジを有するインドでもトップクラスの国立の総合大学である。所属先は社会科学科・歴史学専修（Department of History, Faculty of Social Sciences）で博士課程の研究生（PhD Casual Scholar）という身分であった。博士課程では基本的に講義はなく、ひたすら一人で研究を行い、定期的に指導教授の研究室や自宅で研究の進捗状況を報告し、アドバイスを仰いでいた。博士課程の学生には同大学総合図書館において専用の研究室（エアコン等が完備され、閉館時間を超えて深夜おそくまでの使用が許可されている）があてがわれ、もっとも気候が過酷となる夏季でも研究に専念できる環境が整備されている。同大学に限らず、デリーには数多くの優れた図書館・公文書館が存在し、代表的には英国植民地期の政府公文書・記録を所蔵するインド公文書館（National Archives of India、以下NAI）や19～20世紀インドで発刊された多くの新聞雑誌を所蔵するネルー記念博物館・図書館（Nerhu Memorial Museum and Library、以下NMML）があり、インド近現代史専攻の学生・研究者にとって効率的な文書収集が可能である。これらデリーの高水準な研究環境のおかげで、留学期間中は効率的かつ充実した研究に従事できた。</p> <p>しかし報告者の研究はデリーだけで完結するものではなかった。主要な調査対象であったラージャスターン州ジュンジュヌー県ジュンジュヌーのラーニー・サティ寺院（Śrī Rāṇī Satījī Mandir）を中心に、西はハリヤーナー州から東は西ベンガル州、そして南はマハーラーシュトラ州まで史資料収集やインタビューなどのために精力的に動き回った。重複する時期もあるのだが、留学期間を二つに大きく分けると、1年目はデリーでの集中的な史資料の調査と先行文献の整理に、2年目はデリーを離れ調査地でのフィールドワークに当てられた。留学期間中はデリー大学の学生寮が滞在拠点であったのだが、一つの調査地から別の調査地へと移動・滞在を繰り返しながら、継続した現地調査に従事できたのも、ひとえに松下幸之助記念財団の寛仁な留学支援の御蔭である。心から謝意を表したい。</p>					

**【研究成果報告書】**

次に、報告者の研究（以下、本研究と記す）の成果を報告したいが、出願時の研究内容は、2年間の調査を経て、報告者の予想以上に展開したため、以下にその経緯を記したい。まずは当初の研究テーマの概要を明示し、次に2年間の調査の方法論とプロセスを、そして最後に以上の得られたデータをもとに、当初の仮説からいかなる修正が行われ、どのように展開したのか記していこう。

**(I) 当初の研究構想**

出願時の本研究の趣旨は、近年進展するインド近代史における「カースト」の歴史学的分析をもとに、父系出自集団アグラワールによるラーニー・サティー寺院運営と彼らの「カースト」再編成との関連性を明らかにすることにあつた。「カースト」とは婚姻や食事、職業などに関する規制のもとにおかれた排他的な社会集団を意味し、ヒンディー語では〈生まれ〉を意味するジャーティ (*jāti*) と呼ばれる。この意味で用いられる「カースト」という集団範疇概念は、特にインド植民地期に「構築」されたと言われている。当時の植民地政策（国勢調査など）を経て、カーストは「伝統的に固定的で序列的に階層化された範疇」という当時の官僚のインド理解に沿って「構築」されてきた。それは社会改革運動など植民地政策への応答（いわゆるカースト運動など）の中で、インド人に引き受けられ、同時に再構築されてきた。近代インド史における「カースト再編成」の一事例として、北インド一帯を中心に広がる裕福な商業諸集団 (*vaiśya*) の一つで、特に19世紀後半ごろから積極的なカースト運動を開始したアグラワールに、本研究は注目した。彼らのカースト団体によって当時、大量に編纂・出版された「族譜（その出自や成員の系譜などを記した史書）」を見ると、他の諸集団に比べて文書の多さや質の良さなど際立っているのだが、上述の観点からは十分に考察が試みられてなかった経緯がある。そして、アグラワールのカースト「結集」の重要な要素として、本研究は、ラージャスターン州北部に位置するラーニー・サティー寺院の寺院運営に着目した。なぜなら、彼らのカースト意識が高揚する20世紀初頭に建立された同寺院の運営史を見ることで、カーストの再編成が植民地支配下のコンテクストと同時に、現代社会においても継続されるものとして精査することができると仮定したためである。植民地期の官製文書や族譜への歴史学的分析に、ラーニー・サティー寺院でのフィールドワークを併せることによって、言説としてのカースト再編成が「如実化」される・又はされ得ない変遷を明らかにすることができるのではないかと、以上が本研究の構想であつた。

**(II) 調査の方法論とプロセス**

願書でも記したように、報告者は留学中の2年間、本研究において二つの学術的方法論を併用することを試みてきた。まず一つ目は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのインド植民地期、および独立以降の官製史料や裁判記録などの史資料分析であり、二つ目は調査対象の現在の動向を分析するための文化人類学的な参与観察である。一点目に関しては、NAIでは植民地期の様々なカースト運動・団体にかかわる公的記録・文書等を整理し、それらをもとにインド近代史における諸カースト運動・団体にかかわる先行研究の批判的検討を行った。また当時のアグラワール・カースト諸団体の動向を追うために、NMML

では彼らの発行してきた新聞・刊行物を、他にも在デリーのマールワーリー図書館 (*Mārvāḍī Sarvājyanik Pustkāly*) では彼らが出版・編纂した族譜を収集・整理してきた。また現在も積極的に活動するアグラワール・カースト運動の現状を把握するためにも、ハリヤーナー州はアグローハーの全インド・アグラワール会議 (*Akhil Bhāratīy Agravāl Saṁmelan*) 及びアグローハー開発トラスト (*Agrohā Vikās Trust*) の本部や在コルカタの全インド・マールワーリー会議 (*Akhil Bharatvarṣīy Mārvāḍī Saṁmelan*) 本部での集中的な史資料収集やインタビューを敢行した。

次に2点目に関してだが、調査対象であるジュンジュヌーのラーニー・サティー寺院において特に、長期的かつ集中的な実地調査を行なった。同寺院には1295年に寡婦殉死 (*satī*) を行なったとされるアグラワールの一氏族ジャーラーンの伝説的女傑ナーラーヤーニー・デーヴィーが、氏族の女神 (*kul devī*) ラーニー・サティーとして祀られている。しかし1980年代後半より寡婦殉死が社会問題として改めて注目されて以降、同寺院は様々な女性・人権団体から厳しい批判を浴びた。寡婦殉死という行為のみならず、それによって亡くなった女性を賛美すること (*glorification of sati*) をも厳罰を持って禁止するサティー犯罪 (防止) 法が施行されて (88年) 以降、同寺院の「違法性」が問われ、現在に至るまで多くの裁判が行われている。このような状況のため同寺院は、寺院関係者以外の者に対して決してオープンではない状況にあったが、その運営に深く関わる人物の調査協力のお陰で、報告者は長期間の調査がある程度許され、彼を介して、寺院関係者や司祭との面会を繰り返し、様々な行事への参与観察を継続的に実施することができた。またそれ以外にも、ジュンジュヌーやその周辺でアグラワールによって建立・管理されているサティー寺院 (その他のヒンドゥー寺院を含めて) も重要な比較対象として調査を行なった。また次項で詳述するように、ラーニー・サティー寺院はジュンジュヌーだけでなく、同じ名で建立された寺院が全国的に点在し、寺院関係者によれば、このような同寺院の支部は約500を数えるという。報告者も、その支部のうち、ヒサール (ハリヤーナー州)、デリー、及びコルカタに存する特に重要なものを比較対象としてピックアップし、調査を行なった。

### (Ⅲ) 調査の成果報告と今後の課題

2年間の調査を経た本研究の結論を先に述べると、20世紀初頭のアグラワール・カースト運動とラーニー・サティー寺院運営には、当初構想したような直接的な関係性はなかったが、間接的な関係性があることが明らかになった。以下に、その詳細を調査の成果報告として、記していく。

まずカースト運動とは、1880年代から1930年代にかけて全インド規模で行われたカースト団体を中心とした社会・政治運動の総称で、特に都市部で花開いた。同運動の担い手であるカースト団体とは、カースト自治組織カースト・パンチャーヤットと混同されがちだが、組織構造や運営方法などが大きく異なる。それは、特に都市部の西洋的・近代的な教育を受けた若者によって結社され、19世紀ごろから導入された新たな制度・価値観を積極的に採用し、初期には出自カーストの「社会改革」や「地位向上」のために、後年には各カースト利権を要求する政治活動の母体として運営された組織である。成員は基本的に同一カースト出身者に限られるが、運営の指導者として必要な人材が他カーストや著名な社会・宗教改革団体から招かれるケースも多い。

カースト団体の出現には、とりわけ植民地政府による「カースト」を単位にした数々の植民地政策が、密接に関わっている。その政策の代表例として国勢調査におけるカースト調査がある。国勢調査(1871-72年から全インド規模で開始)では、最初期から各ジャーティはバラモン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラ(+アウトカースト)という太古のヴァルナ制 (*varṇa*) に割り当てられ、ランキング化されていった。国勢調査によって公表されたカーストの序列化は、黎明期にあった数多くのカースト団体による政府への意義申し立てを促進し、彼らによる自らの「地位向上」の陳述は20世紀初頭に最高潮に高まった。各団体は、自らの位置づけの「歴史的」な証左として、サンスクリット古典籍や考古学的・刻印学的な形での証拠集めに腐心し、それらはカースト族譜として出版された。数多くのカースト団体の中でも、商業諸集団(ヴァイシャ)は、カースト運動の中心的・主導的担い手とされ、19世紀後半から自カーストの地位向上・再定義に従事してきた。アグラワールもまたカースト運動に最初期から積極的に関与してきたカーストの一つで、彼らの団体数や成員数、族譜や新聞など発行物の豊富さを見ても、活動の規模は他を抜きんでており、そのうち幾つかの団体は現在も運営を継続している。

彼らの発行した種々の族譜によれば、アグラワール・カーストの起源譚は1870年代頃登場し1930年代には体系化され、その要旨は以下のように記せる。アグラワールは、神話時代の「偉大なる王」アグラセーン (*Mahārāj Agrasen*) を始祖として始まったカーストと定義される。彼は神々の王インドラとも比肩するほどの傑出した王として描かれ、特にラクシュミーの恩恵を得て、現在のパンジャブ州からハリヤーナー州を経てアグラマまでに至る巨大な王国を作り上げた。ラクシュミーはアグラセーンの苦行に満足し、彼の家系 (*vaṃś*) を守る女神 (*kul devī*) になった。アグラワールの起源に関して、アグラセーンとパラシュラマ(ヴィシュヌの7番目の化身 (*avatār*)、地上から全クシャトリアの抹殺を企てた)との戦争がその契機とされる。戦争においてアグラセーンに敵わなかったため、パラシュラマは彼に子供ができなくなる呪い (*śrāp*) をかけ、彼の家系を根絶やしにしようとした。それに抗するために、まずアグラセーンはクシャトリアの法 (*dharm*) を捨て、ヴァイシャのそれを受け入れた。そして子孫を得るために(18人の妻のため)18回のヴェーダの祭式 (*yajñ*) を執り行い、17人目まで妻が次々と懐妊した。しかし18回目の祭式に至った際に、次々と犠牲獣が祭式で犠牲になるのを目の当たりにした王は自責の念に苛まれ、この祭式を途中で取りやめ、今後一切の犠牲獣を用いた祭式 (*paśuyajñ*) や供犠 (*balidān*) 及び一切の肉食・殺傷を禁じた。この18回(厳密には17.5回)の祭式でできた息子達の家系は、それぞれの祭式を担当した聖仙 (*ṛṣi*) の名を取って、18(17.5)のゴートラと呼ばれるようになり、それらゴートラを総じてアグラセーンの家系はアグラワールと呼ばれることとなった。

この起源譚に従って、始祖アグラセーンの王都であったとされる現ハリヤーナー州アグローハーの開発事業と当地における寺院建立は、アグラワールのカースト運動における重要な活動の一つであった。植民地期に胎動したアグローハー開発計画が実現化の軌道に乗り出したのは、独立後の1970年代であり、2000年代に入り寺院コンプレックス、アグローハー・ダーム (*Agrohā Dhām*) が完成した。同寺院では、アグラセーンとともにカーストのクルデーヴィー、ラクシュミーも本尊として祀られ、これらが汎アグラワールのカースト・アイデンティティ構成のための重要な要素といえる。ではこの文脈で本研究が中心的な調査対象と挙げたラーニー・サティー寺院と女神ラーニー・サティーは、どのように位置づけられるの

だろうか。彼女の誕生譚と寺院建立の歴史を紐解きながら、論じていく。

ラーニー・サティー寺院の本尊であるラーニー・サティーとは、13 世紀後半に現ハリヤーナー州マハム近郊の村の豪商グルサムラジー（アグラワールの 18 ゴートラの一つゴヤル・ゴートラ (*Goyal*) 出身) の娘、ナーラーヤーニー・デーヴィーが神格化した存在である。聡明で美しいナーラーヤーニーは、幼少からサンスクリット古典籍に通じ、驚くべき宗教的能力を有していたという。彼女はヒサールの宰相ジャーラランダース（アグラワールの 18 ゴートラの一つバンサル・ゴートラ (*Bansal*) 出身) の長男タンダランダースと結婚した。しかし婚姻式直前に、タンダランダースは自分の駿馬を盗もうとしたヒサール太守の息子を彼とは気づかずに殺してしまい、太守の復讐を恐れて一族ともどもヒサールからジュンジュヌーへ移住した。婚姻の儀式が終わり、ナーラーヤーニーをマハムから自分の家へ連れて帰ろうとした際に (*muklāvā*)、復讐のために待ち伏せしていたヒサール太守の軍勢により、現ハリヤーナー州デーヴァサルにおいて攻撃を受けた。タンダランダースは勇敢にも応戦するも、背後からの一撃により命を落とした。自分の夫が殺された時、怒りと悲しみでドウルガー女神 (*Raṅgachandī*) のようになったナーラーヤーニーは夫の剣を手に取り、相手を全滅させた。戦争の後、当地で彼女は従士ラーナー (*Rāṇā*) に看取られ、夫の遺体とともに自分の体から炎を出してサティーを行った。サティーの直後、彼女はラーニー・サティー女神となってラーナーの眼前に顕現し、駿馬に自分の遺灰を載せそれが止まった場所に祠を建てるよう彼に命じた。彼女の遺灰を載せた馬は自然と動き出し、やがてジュンジュヌーで歩みをやめた。ラーナーは一連の経緯と彼女の命令をジャーラランダースに伝え、ジャーラランダースは彼女を自分の家のクルデーヴィーとしてあがめ、ジュンジュヌーの地に彼女の祠を築かせた。ラーニー・サティーの恩恵によって彼の家は栄え、その子孫はジャーラーンと呼ばれるようになり、後にラーニー・サティーはジャーラーンだけではなく、それが所属するバンサル・ゴートラ全体のクルデーヴィーとして信仰を集めるようになった。

現在のラーニー・サティー寺院は、ラージャスターン州観光局が発行する小冊子でも同地の観光名所として必ず紹介されるほど巨大な寺院コンプレックスとなり、インドの数あるヒन्दウー寺院の中でも寺院施設の規模や収益のそれはトップクラスとされている。しかし古くからそうであったわけではなく、少なくとも今から 100 年ほど前まではあるプジャーリー (*pujārī*) とその家族が代々管理していた小さな祠であった。しかし 1912 年にジャーラーン家の出身で実業家の名士 7 名が集まり、ラーニー・サティー寺院建立のための信託基金を組織したのがきっかけで、寺院は建築の規模やその運営の性質においても大きく変貌を遂げる。1917 年には寺院建築が始まり、1930 年代に寺院の正面玄関に 7 階建の大門 (*Siṃhadvār*) が、また 50 年代には白磁の本殿 (*vimān*: 尖塔のある寺院建築) や巡礼者の宿坊 (*dharmśālā*) が建設された。1957 年には、ジャーラーン家の名士を中心に公益法人「ラーニー・サティー寺院 (*Śrī Rāṇī Satījī Mandir Trust*)」が、彼らの事業の本拠地カルカッタに設立された。同法人の主要なメンバーはジャーラーンのみならず、バンサル・ゴートラの他の氏族からも多く参加し、多額の寄付が集まった。彼らが寺院周辺に女子校や公民館を設立することで、ラーニー・サティー寺院は単なる寺院から複合公益施設へと成長していった。

以上見てきたように、ラーニー・サティー寺院はアグラワールの 18 ゴートラの一つ、バンサル・ゴートラの、特にジャーラーン氏族のための寺院であって、アグラワールのカースト運動とは直接的な接点は

見られない。しかしながら、だからといって両者に全く関係性がなかったと結論付けるべきではない。ラーニー・サティー寺院運営とは、正確にはアグラワールのカースト運動によって体系化されたカースト観が背景となって、氏族やゴートラといったより小規模のコミュニティ間での結集が行われた具体例と解釈すべきである。カースト族譜研究において、編纂することによる情報の「画一化」そしてそれを公式見解にすることによる情報の「権威化」という働きに着目すべきである。族譜は、それまで地域的に雑多であったであろうコミュニティの起源譚を画一化し、カーストの組織構造を体系化していった。このような動きを背景に、血縁関係を基礎にした小規模の各コミュニティは自らの「起源」やカーストの「位置づけ」への意識を高めていった。20世紀初頭という時代はまさにそのような意識が高揚した時代であり、ちょうどその頃1912年ジャーラーンの名士たちによってラーニー・サティー寺院建立の信託基金が設立された。57年の公益法人化を経て、60年代に入り寺院の大方が完成する時期に、同寺院は街の片隅にある小さな祠からコミュニティを象徴する寺院への成長を始めた。この一連の動きは、言い換えれば、ジャーラーンを中心にしたバンサル・ゴートラによる自らのアイデンティティの再構築といえる。以上から、同寺院運営の歴史は、カースト運動によって準備された言説としてのカースト理解が、いかに人々に受け入れられ、カーストからはより小規模な集団的アイデンティティにいかに換骨奪胎されていったかを示す貴重な具体例の一つとみなされる。